



企画・取材・発行  
射水商工会議所 魅力発信プロジェクト  
(事務局) 射水商工会議所  
〒934-0011 射水市本町2-10-30 クロスベイ新湊 2階  
TEL: 0766-84-5110

発行日  
2024年3月31日

引用・参考文献

「新湊市史」新湊市史編さん委員会  
「しんみなとの歴史」新湊市  
「海の富豪の資本主義 北前船と日本の産業化」中西聡  
「北前船の近代史—海の富豪たちが遺したもの—」中西聡  
「北前船と交易の物語」加藤貞仁  
「引札の世界 北前船がもたらした華麗なる広告チラシ」加賀市  
「日本海の商船 北前船とそのふる里」牧野隆信

資料提供

射水市新湊博物館  
一般財団法人 高樹会

協力

取材にご協力いただいたみなさん、  
一般社団法人 射水市観光協会

取材・制作

株式会社 ワールドリー・デザイン

印刷・製本

有限会社 明野印刷

# 新湊 船運さんぽ



波を先取り、  
舵を切る。  
巨利を生んだ  
交易ビジネス

北前船がもたらした  
産業、暮らし、文化

国指定重要無形民俗文化財  
放生津八幡宮祭の曳山・築山行事  
エネスコ無形文化遺産拡張提案候補への選定



# 船がもたらした つながりと豊かさ

## 交易が変えた、港町の暮らしと文化

富山湾を臨む射水市の放生津地域は、庄川を挟んだ六渡寺地域とともに1,300年以上前から湊町として栄えてきました。現在も国際港湾（50年余り前は放生津潟）を配し、人々の暮らしの真ん中には内川が流れます。

鉄道・道路などの陸上交通やインターネットが発達する以前は、海や川を行き交う船がものや情報を運ぶ役割の多くを担っていました。船運による交易が、さまざまな富や豊かさをもたらし、人々の生活や文化を変えたのです。交易は鎌倉時代からすでにありましたが、何とんでも、最盛期は江戸後期～明治初期ごろの「弁財船（北前船）」。当時は地方の商品価格差が大きかったため、津々浦々で商売をしながら莫大な利益を得ました。米や石・鉄、魚肥など、あらゆる商品を大量に運んだ北前船が、今に通じる産業基盤や食文化などの礎を作ったのです。今から200年以上前、当時の情報・技術を結集して航行されたハイリスク&ハイリターンな船運ビジネス。関わった人々の偉業や功績は今も色褪せることなく、また、その開拓精神は、先行き不透明な閉塞感漂う現代にこそ、輝いて見えます。さあ、船運の旅へかけてみましょう！👏

六渡寺日枝神社の境内を囲む272柱の玉垣には、大阪から北海道までの海商の名前や船名が彫られています。大坂の油屋七兵衛や木屋市郎兵衛、兵庫の北風荘右衛門、下関の北国屋と左衛門など、錚々たる豪商の名前が並びます。

## 新湊における船運のポイント

### ①伏木と並び栄えた六渡寺・新湊

県内では岩瀬や伏木と並び、六渡寺や放生津も北前船で栄えた地域です。船と荷主の間で荷物の積込や荷揚げなどを斡旋する「船問屋」の多かった伏木に対して、実際に船を持ち津々浦々で商売する廻船業を行った「船主」や「船頭」は、六渡寺や放生津に住む人々が多かったようです（11ページ参照）。

### ②北前船のぼろ儲けぶり

訪れる津々浦々で、荷を買い付けたり売り捌いたり、一度の航海で行きも帰りも倍の儲けを得られることから「バイ船」と呼ばれた北前船。「板子一枚、下地獄」という危険な航海と引き換えに莫大な儲けを得られる「動く総合商社」でした。しかしながら、早い時代の変化の波を乗りこなせないと、新たな技術や事業によって塗り替えられる、弱肉強食のシビアな世界でもありました。

### ③沖に停泊し川へは小舟で運ぶ

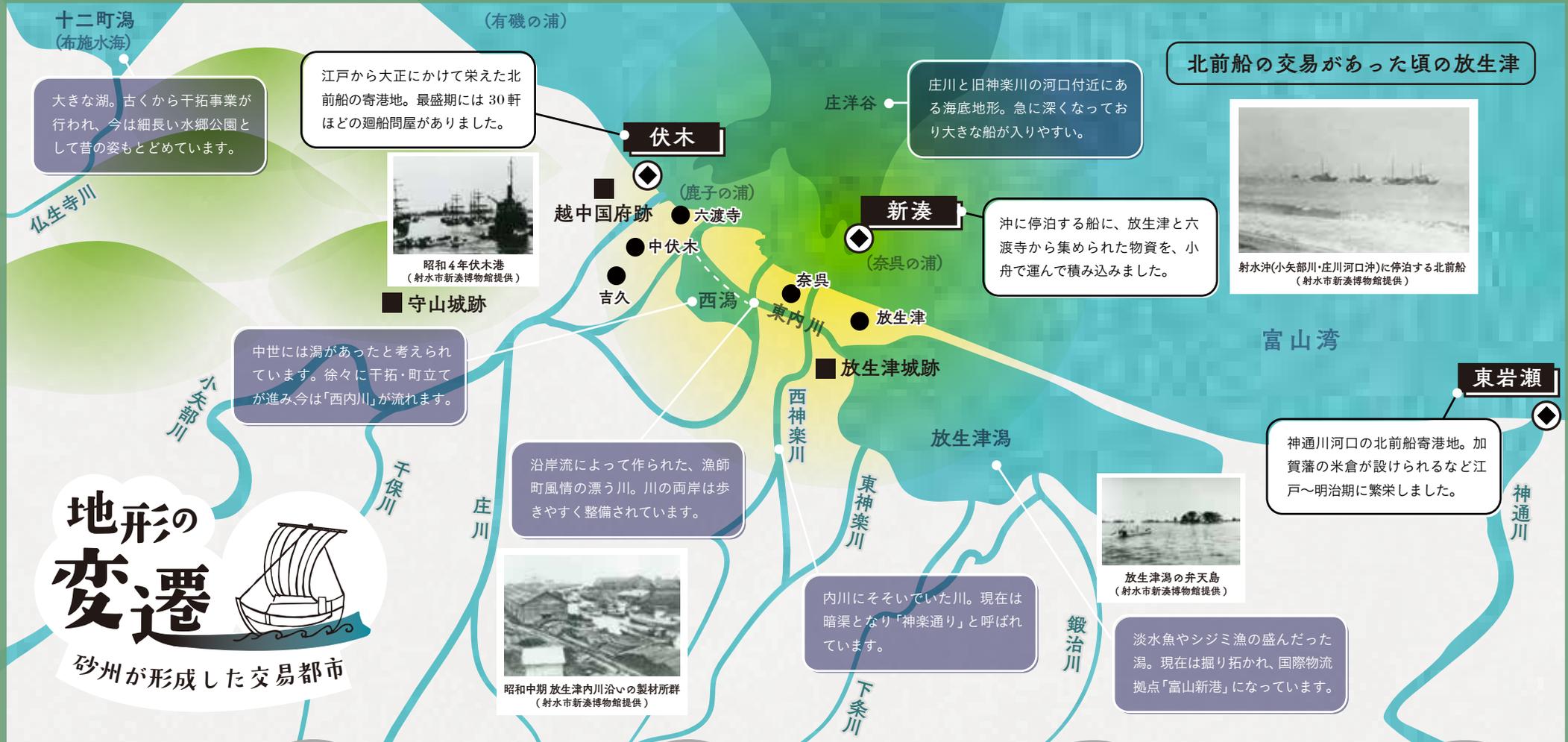
新湊エリアへの荷下ろしは、少し沖のほうに停泊した弁財船から、小さなはしけ船に荷を積み替え、内川や海へ注ぐ様々な河川を使って内陸に運ばれました。東北から運ばれた木材は、庄川河口や放生津潟に貯木されました。

### ④北海道とのつながり

富山から積み込んだ米は大阪や東北に売られ、東北やさらにその先の北海道からは、稲作に使う魚肥や、今も富山の食卓に欠かすことのできない昆布などがもたらされました。また、北洋漁業に進出するきっかけも、北前船の交易によるものとされています。

### ⑤今につながる産業の礎に

莫大な富を得た船主たちの多くは、銀行や運輸・工業などの地域産業を作り出し、教育機関の立ち上げや文化の発展に多大なる貢献をしました。貯木場周辺では製材業から建築業へ事業を変換した企業も多くあり、今も地域を支える大切な産業の一翼を担っています。



# 港町の交易の変遷

## 廻船 (津軽船)

1200年代～



鎌倉時代後期には、山王神人や時宗の信者たちが運行する津軽通いの大きな船が、日本海を往来していました。十三湊(青森県五所川原市)～放生津湊～敦賀湊(福井県敦賀市)への流通ルート「北国航路」が開けており、盛んな交易がありました。江戸時代になると、加賀藩では年貢米でお金を得るため、敦賀・小浜・大津に蔵宿(=米問屋)を設けて、上方へ米を運ぶようになりました。



**氣比神宮** 福井県敦賀市  
主祭神伊弉沙別命は、御食津大神とも称され、食物を司り、古くから海上交通、農業はじめ生活全般を護り給う神として崇められています。



御食津大神

ご利益 海上安全 五穀豊穡 商売繁盛



放生津・六渡寺エリアは県内でもっとも多く船主を輩出しています！

1600年代～

## 弁財船 (北前船)



藤井能三 宮林彦九郎

江戸時代も津軽船ルートが日本海海運のベースであり放生津湊は越中を代表する拠点でした。北海道、東北との交易のほか、越中の各湊や越後、能登、加賀など行き来する地廻り海運も盛んで、内川や庄川など内陸の河川を使った舟運と結びつき発展しました。北前船の起点終点となった大阪には、全国の大名が年貢米を売りさばくための米倉を設けていました。



**住吉大社** 大阪府大阪市

全国数千ある住吉神社の総本社。底筒男命・中筒男命・表筒男命の三神と神功皇后を祀っています。海上安全はじめ海運と漁業の守り神です。



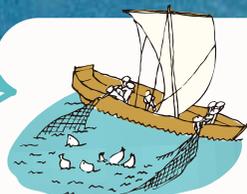
底筒男命・中筒男命・表筒男命

# 港町の漁業の変遷

## 古代～ 釣漁



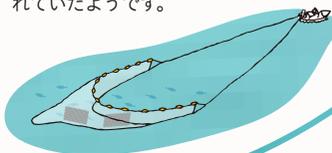
越中国司・大伴家持が奈呉の浦で釣りをする海人を歌に詠みました。地曳網、手繰網、はえ縄、刺し網、台網(定置網)へ発展したと考えられています。



平安時代～

## 手繰網・底曳網

網を浜や船に引き寄せ、魚をとる漁法(=引網)。平安時代末期には固定した無動力の舟で網をたぐり寄せる「手繰網」が行われていたようです。



1800年半ば～

## 汽船・西洋型帆船

明治期に入ると、大型汽船の台頭により北前船の船賃が低落します。多くの海商が北前船から手を引き、転業しました。一部の者は汽船会社を作り、さらに大規模な海運へと乗り出しました。



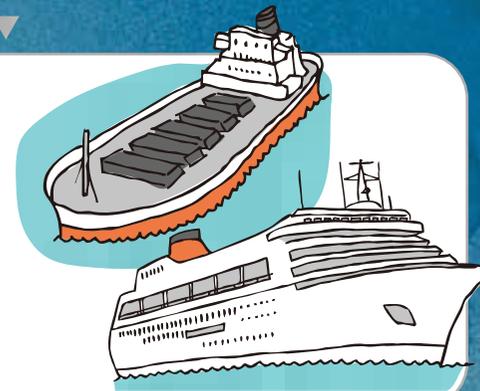
南嶋間作

南嶋商行や新湊汽船会社を設立。商船学校の開設にも奔走！

1900年代～

## タンカー、旅客船等

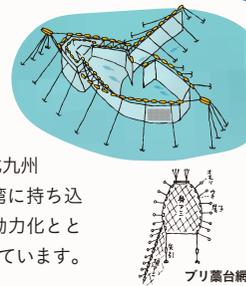
汽船の就航により県内の港の機能は伏木港に集中。貨物取扱量が増えるにつれ、港の改善・改良を重ねました。港湾機能の拡大と工場用地確保のため、1968年に富山新港が開港。1986年には国際拠点港湾となり、近年は大型のクルーズ船なども寄港するようになりました。



室町時代～

## 台網▶定置網

現在の定置網の原型「台網」は室町時代(1570年頃)～。北九州発祥「日高式大敷網」が富山湾に持ち込まれたのは明治40年。船の動力化とともに網揚げも機械化・省力化しています。



ブリ養台網

昭和～

## かご縄



延縄式に連結したかごに餌を入れ海底に沈める漁法。ベニズワイガニをとるカニかごは1962年に魚津市の漁師・浜田寅松さんが考案後全国に広まりました。

明治～

## 北洋漁業



近海漁業の不漁が続いた明治期には遠洋漁業が盛んに。廻船業で財を成した米田六三郎は、樺太の漁場にいち早く着目し、富山県で初めて北洋漁業に出漁しました。中瀬七造、金木喜三、朽木清次郎、袴信一郎など、新たに北洋漁業へ進出する北前船主が多くありました。中でも八島八郎は、廻船業から北洋漁業・加工業、さらに倉庫業へと鮮やかな転身を果たしました。



米田六三郎

# 北前船 主な寄港地と積荷



さんしん しちそう  
**三津七湊**  
 三津…安濃津、博多、堺  
 七湊…三国、本吉(美川)、輪島、岩瀬、今町(直江津)、秋田(土崎)、十三湊

室町末期に成立したとされる「貞応の廻船式目」に挙げられている当時の有名な湊。中世には、日本海側に所領を持つ北条氏が、敦賀湊から十三湊にかけて連絡用のルートを作りました。

大阪から北海道を日本海回りで往復した北前船は、津々浦々の寄港地で積荷を売ったり仕入れたりと、利益を得ました。売れるものは何でも運んだことから「動く総合商社」とも呼ばれます。

運び出すもの

## 米

砺波・射水平野の米を、北海道や大阪へ運びました。北海道を目指す下り船の最大の商品は米でした。各地の大名から集められる年貢米を大阪に輸送するという、運ぶだけの仕事「賃積み」もありました。



## 菅笠

福岡町で作られた菅笠



## 薬

呉東(富山市周辺)で作られた薬。



## 酒類

高岡で作られた銅器

## 銅器



## 醤油



## わら工品

射水・氷見の農村で作られた、ムシロ、縄などを北海道へ運びました。



買ってくるもの

## 塩



大阪の帰りは、綿糸、砂糖のほか、下関でロウ、山陰で砂鉄などを仕入れており、特に瀬戸内の塩が最も大量の仕入れでした。塩は新湊で中継し、北海道へ運ぶこともありました。

## 塗物



## 昆布

北前船によって大阪に運ばれた昆布。これにより富山では昆布を食べる習慣が定着し、今でも昆布べやとろろ昆布、昆布巻きかまぼこなどの郷土食として親しまれています。昆布は、薩摩から琉球を通じて、中国にまで密貿易されていました。



## 木材

秋田からは杉材、青森からはひば材などが積み込まれました。貯木・乾燥を行う藩直営の材木置き場(=田)が設けられ、その周辺で人足の需要が増し、材木を使った細工物をする職人も増えました。

## 石材

船を安定させるための重石も兼ねて運ばれた瀬戸内産の御影石、淡い青色が美しい笏谷石など、石材も多く運ばれました。



## 紙



## 陶器



## 魚肥

北海道のイワシやニシンの魚肥は、新湊の商人などの手を経て、富山平野の水田に仕込まれて行きました。射水では放生津潟周辺などの湿田に、特別よくきたそうです。



## 綿糸・綿織物

大阪から仕入れた綿糸を県内の農家へ渡して、綿糸や綿織物へ加工。それを東北地方や北海道へ運んでいました。



# 乗組員と役割

乗組員は最初に見習いである「炊」として雇われます。つらい作業のため逃げ出す者も少なからずいたそうです。しかし、才覚のあるものは、自分の力で「知工」や「船頭」へと昇格できる、実力がものをいう組織でした。乗組員は 1,000 石積の船（千石船）で 10～12 名、1,500～2,000 石積の大型船でも 14～15 名程度。船 1 隻が、「動く総合社」のようでした。

役職	役割	おおよその年齢	給与など
船頭	船の最高責任者	30～50代	2～3両 + 帆待ち
知工	ナンバー2、事務長		1.3～2両 + 切出し
表	航海士、舵取り役		
片表	副航海士、補佐役		
親父	甲板長、現場責任者	20代前後～	1～1.2両 + 切出し
水主・若衆	一般の乗組員		0.2両 + 切出しの一部
炊	炊事、雑用	14～5歳	



## 船の最高責任者 船頭

現在の船長。船頭は、乗組員を統率し、船の運航から商品の売買までを行う最高責任者。航海の知識・技術だけでなく商才も必要でした。主から雇われた船頭は「沖船頭」といいます。船主自ら船頭を務めるものを「直乗船頭」といい、その船を「お手船」と呼びました。船頭を経験した後、船主となる者も少なくありませんでした。船頭は船の権威と信頼を誇示する役割もあり、入港時には紋付袴で正装しました。



## 経験豊富な船乗り 親父

経験豊富な水夫。現在の甲板長。若い水夫たちの指揮を行います。賄い（＝食事）なども指導する、叩き上げの現場責任者です。



## 船内ナンバー2 事務長 知工

船頭の下にいる事務長。積荷の受け渡しや帳簿管理、金袋の出し入れなどを担当。大金の動く取引も多かったため、自力で金策して荷物を集めるなど、頭脳明晰でコミュニケーション力の高い人でないと務まりません。知工から船頭に昇格する者がしばしばいました。



## 最高経営責任者 船主

船の経営を統括する責任者。自らが船頭を務める者も、大小の船団を擁する大船主もいました。大船主は陸上で経営の指揮を取りました。明治の初め、新湊と伏木の船主らを中心に「北冥社」という同業者組合が作られ、船荷の運賃や乗組員への現物給与の割合などについて「回漕規則」が設けられました。

	放生津		六渡寺	伏木
船主総代	宮林彦九郎 南島久七 中瀬七造 稲垣藤七	中島佐久平 大井清平 稲垣伊右衛門 牧七郎平	朽木清平 金木喜三 朽木清次郎	藤井能三 八坂金兵衛 堀田善右衛門 藤田与左衛門
船頭総代	渡辺八三郎 塩谷久左衛門	宮林市平 牧又七	朽木七郎右衛門 串岡次郎吉	西海与平 辻久右衛門
船子総代	網谷三六 柴武右衛門	板谷又右衛門 桶谷喜十郎	朽木五平 明野文三郎	寺林十右衛門 越後与茂三郎
戸長	(放生津) 吉野文五郎 片岡基平 泉田又五郎	(新町) 堀江又二郎 (三ヶ新) 桃井茂平	田代喜七郎	蜂谷徳平

金木家文書「北冥社明治九年回漕規則」／射水市新湊博物館蔵

(明治8年5月15日)



## 船乗り 水主・若衆

航海作業一般を行う乗組員＝水夫。同郷や血縁の者で固められることが多く、しっかり雇用契約も取り交わされていました。



## 見習い船員 炊

乗組員の中でもっとも若く、経験の浅い少年。食事作りや雑用などをします。



## 船の舵取り役 航海士 表

航海経験の豊富な、頼れる航海長。船首にいて前を見ながら舵取りを指示します。船の操縦に関する責任を負います。

## 副航海士 片表

表を補佐する役。いずれは表に！





船箱  
ふねだんす

大切な書類やお金、着物などを入れる船箱。これは「懸硯(かけすずり)」と呼ばれる小型のもので、主に金庫として利用されました。外側はケヤキ、頑丈な鉄板で角を保護しており、海中に放り出されても水の入らない造りになっています。(板谷家資料)



船磁石  
ふなじしやく  
(和磁石)

船の航行に欠かせない、方位を知る道具。船首に据えつけて使いました。子(北)、卯(東)、午(南)、酉(西)が反時計回りに刻まれたもので、磁針の北が指す目盛上の方位は、そのまま船の進行方向を示します。(一般財団法人 高樹会蔵)

と かいひょうてき  
渡海標的

郷土の天才学者・石黒信由による、最強の航海マニュアル。船の上から北極星を測ったり海水から真水を精製したりする方法などが紹介されています。船が遭難・漂流してもちゃんと帰港できるよう、天文学の見地から航法が示されています。(一般財団法人 高樹会蔵)

真水の精製方法も紹介



護符  
ふご

航海安全を祈願し、神仏に供えたお札。海上で台風などに遭い、大波を受けた時に海水が船の上から入ってしまう弁財船での航行は、海難の危険と隣り合わせでもありました。(太田家資料)



と お め が ね  
遠眼鏡

海上で、他の船や陸地を確認する際などに使用されました。これは、名人・岩橋善兵衛の作で、和紙を貼り重ね漆で仕上げた「一閑張(いっかんぱり)」という手法で作られています。赤・黒2種の漆と金箔で美しく仕上げられた芸術品のような望遠鏡です。(一般財団法人 高樹会蔵)



ふなおうらい て が た  
船往來手形

船が諸国を往来するための通行証明書。毎年許可制のため古い手形は返却または処分されていたようです。手形は、密封できる容器に入れ、船頭が大切に所持・管理していました。

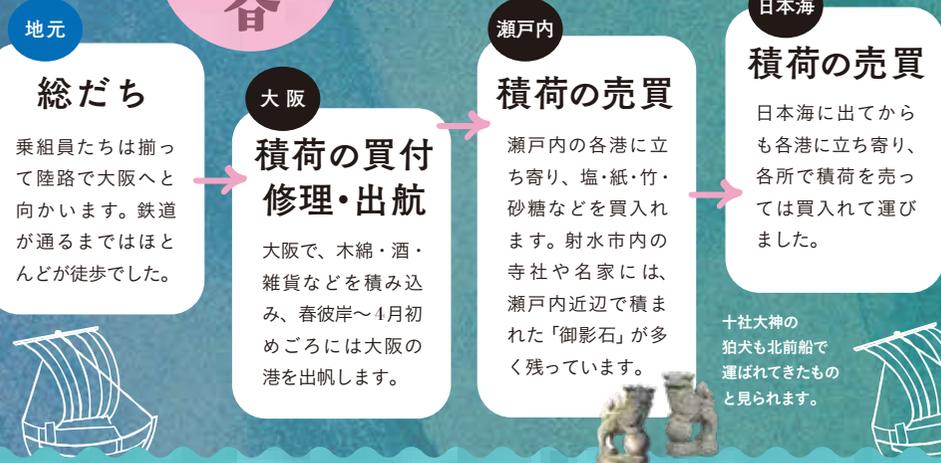


木製手形。放生津町の「菊屋伊左衛門船頭七人衆」の船であるとわかる。(板谷家資料)

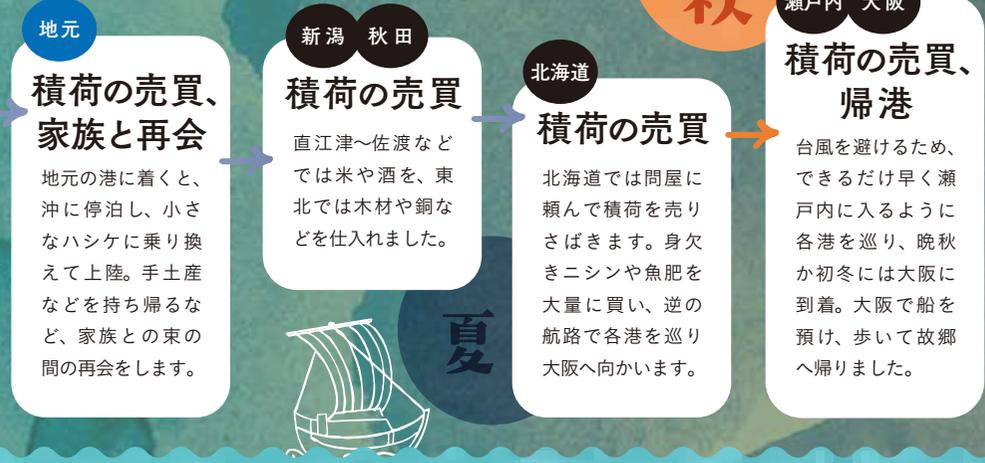
書類が密封できる木製の手形入れ。越中放生津「柴屋彦兵衛」の「長船丸」とある(柴屋資料)

船中生活と  
交易の流れ

春



秋





13代・彦九郎

みやばやし ひこくろう

## 宮林彦九郎家

Hikokuro Miyabayashi

放生津を代表する大船主

ルーツは能登の守護・畠山氏の家臣といわれ、天正14年(1586)に放生津の町人に。漁具に必要な縄やワラ製品を扱う茅店から始まりました。後に網主として漁業に乗り出し、8代・彦九郎が加賀藩の「御用米」の輸送を始めます。数年後、兵庫の豪商・北風荘右衛門の沖船頭(10ページ参照)を経て、加賀藩より綿取引の独占権を得て、大阪の綿を大量に扱ったため「綿屋」と呼ばれるようになりました。13代・彦九郎の時代、1850年前後には、藩最有力の船主として和船を7~9隻所有。藩主前田家の慰子姫(後の栖川宮威仁親王妃)を屋敷で預かっていたこともあります。伏木の藤井能三(17ページ参照)らとも交流が深く共同事業も創設しましたが、明治20年(1887)には海運から手を引きます。数々の銀行設立に関わり、県議員の要職も担うなど、地方経済のリーダーとして活躍しました。

1 庭園は、北前船で運ばれた立派な石や手水鉢、灯籠などが配された見応えある造り。屋敷の一部は一時期、料亭として使われていたこともあり、お祝いの席の思い出を持つ地元の方々も少なくありません。2 銭屋五兵衛(17ページ参照)から贈られたと伝わる石灯籠は地面に直接埋められています。「見ざる聞かざる言わざる」の三猿が彫られています。3 敷地内別棟にある、慰子姫のために作られたと伝わる髪結び場。華やかな往時の面影を宿す、珍しい色ガラスがはめられた建具が印象的。4 船の中で使われてであろう道具たち。和磁石や双眼鏡、ゲーム用の木札などが展示されていました。5 13代・彦九郎のガラス乾板写真。藤井能三との2ショットなども。



1	2	3
	4	5



## 宮林家

Map B-1

2023年夏より「放生津北前船資料館」として企画展示やイベントなどを不定期開催。現在はオンラインミュージアムとしてWEB上に建物内部の様子や資料が公開されています。



## 綿屋が運んだもの





みなみじま ま さく

## 南嶋 間作

Masaki Minamijima

ポスト北前船時代の海運の先駆者

一度は教師となり、26歳で家業である回船業を継いだ間作。当時は海運業・漁業にとって大変革の時期でした。和船による国内交易に限界を感じた間作は中国に渡り、大型汽船による商売の方法を学びます。帰国後、南嶋商行を設立し、大型のドイツ製汽船を購入し「奈古浦丸」と名付け、中国との定期航路を開拓しました。汽船で国内の海運業を行う新湊汽船会社も設立。さらに、地元の有志らとともに商船学校の開設にも奔走しました。享年35歳という短い人生でしたが、日本海貿易の発展と地元産業の発展に大きな貢献をしました。



ふじい のうそう

## 藤井 能三

Nouse Fujii

伏木港開港に私財を投入した実業家

弘化3年(1846)伏木にある廻船問屋「能登屋」の三右衛門の長男として生まれた能三は18歳で家業を継ぎます。宮林彦九郎や県内外の事業家との交流もあり共同事業や公共工事などを精力的に行いました。明治6年(1873)富山県内初の小学校を地元で創設したのも能三です。教師の給料や生徒の教科書も私費で用意しました。私費で西洋式の伏木灯明台を建て、「伏木築港論」を発刊し、県内で初めての汽船会社を設立するなど、伏木港の整備を力強く進めた人物です。明治19年(1886)頃からの不景気で、倒産が相次ぎ北前船で築いた財産は無くなってしまいましたが、地域の産業振興や人材育成に多くの業績を残しました。

「岩瀬五大家」筆頭  
北陸の五大北前船主の一家

ば ば どうきゅう

## 馬場 道久

Dokyu Baba

江戸後期から活躍した廻船問屋。「岩瀬五大家」の筆頭に挙げられ、北陸の「五大北前船主\*」のひとつ。明治中頃には汽船経営に舵を切り、事業の近代化にも成功しました。個人船主の団結を図る目的で浅野総一郎らと共に日本海運業同盟会を結成したほか、町村会議員や石川県会議員・富山県会議員、岩瀬町長や岩瀬銀行頭取などを歴任。1890年には富山県多額納税者として貴族院議員に互選・在任。9代当主・道久の妻はは、旧制富山高等学校設立のために多額の寄附をしたことでも知られています。



8代・道久



### 伏木北前船資料館

廻船問屋の旧秋元家住宅。伏木と周辺の村々の歴史や水運に関する貴重な資料を展示しています。

ほった ぜん えもん

## 堀田 善右衛門

Zenemon Hotta

経済・文化の要  
華麗なる一族

江戸時代から伏木港を拠点にしていた廻船問屋「鶴屋」の堀田家は南北朝時代に宗良親王に随順していた公家の末裔と伝えられています。当主は代々、善右衛門を名乗ります。4~5代・善右衛門の頃、享和2年(1802)には放生津の柴屋彦兵衛の奥州木材を江差から伏木へ運送した記録も。6代は、明治29年(1896)に伏木銀行を創立。7代・8代も様々な事業を手掛け、9代は県議会議員、10代の堀田善衛(1918~1998)は芥川賞作家。伏木の船運を語る上で欠かせぬ煌びやかな一族です。



### 旧馬場家住宅

江戸後期から北前船で活躍し、明治には汽船の経営で栄えた馬場家。国の有形文化財に登録



### 森家

明治11年ごろに建てられた北前船廻船問屋。江戸時代以来の町屋建築構造の国指定重要文化財

北陸で最も有名な海運業者

## 銭屋 五兵衛 Gohe Zeniya



加賀国宮腰(金沢市金石町)に生まれた五兵衛。6代前の吉右衛門から両替商を営んでいたため、屋号を「銭屋」と称していましたが、祖父の代からは金融業、醤油醸造業を営んでいました。17歳で家督を継いだ五兵衛は新たに呉服、古着商、木材商、海産物、米穀問屋なども経営。50代後半から本格的に北前船を使った海運業に乗り出します。以降約20年間で江戸時代を代表する大海運業者となり、当時禁止されていた海外との密貿易なども行い、さらに莫大な力を得ます。加賀藩の経済の要として御用金の調達も担当。晩年は河北潟の干拓事業に着手するも、反対派の策略により捕らえられ、獄中で80歳の生涯を終えました。



### 松原酒店の引き札

引き札に記された3代目・次吉郎(1854~1927)の時代に作られたもの。今から100年以上前のものと思われる。能「高砂」の一場面や縁起のよい恵比寿様などが精緻に描かれています。

# 引き札

引き札は、江戸~大正時代にかけて作られた広告チラシ。荷を買ったり売ったりしながら各港を廻る北前船によって広められた、当時最先端のメディアでした。裕福な船主に使ってもらおうとアピールするため船問屋や船関連商店はもちろん、米・酒・塩など遠方の産品を扱う商店や、航海後慰勞のために立ち寄る温泉旅館などが発行しているものも多々あります。美しい彩色と大胆な構図と絵柄が魅力の引き札ですが、時代が下ると、略暦や時刻表などの機能が加えられたものも増えました。



### 松原酒店 Map B-1

創業は200年以上前の老舗酒店。松原家中興の祖、3代目・次吉郎の時代に作られた引き札が、店内に展示されています。現在は6代目が切り盛りしています。



引札「諸廻船問屋 越中伏木港 堀田善右衛門」(加賀市北前船の里資料館)



引札「諸廻船問屋 越中伏木港 藤井能三」(加賀市北前船の里資料館)



現在では珍しい三角屋根の土蔵倉庫群。時代劇映画のロケ現場として使われたこともあるそう。倉庫業開始前は遠洋漁業漁具置き場として使われていた場所で、今は低温倉庫として現役で活躍しています。

船運とともに発展した倉庫業。時代の変化に対応し続ける物流の達人！

やしま そうこ  
**八島倉庫**

Map A-1

Yashima Soko



?



今でも貨車専用のホームや引き込み線の名残が。



北前船主であり地元網元でもあった八島八郎は、周囲の反対を押し切って北洋漁業に進出。明治25年(1892)、北洋漁業を生業に漁業部門を創業。八郎の遺志を継いだ庄太郎と勝己が、昭和7年(1932)年には倉庫部門を分離独立させます。当初は米・海産物・セメント・肥料等を扱い、後に政府米の指定保管所に。食糧の輸出入に伴う多様な業務も担いました。近年では物品の保管に留まらず通販の出荷代行や受発注などの業務へも拡大中。時代とともに変わる人々のライフスタイルや消費行動に合わせ、華麗に変貌を遂げている企業です。

木材の販売・加工からスタート。現在も地域の産業を牽引！



ちよぼくじょう そうこぐん  
**貯木場、倉庫群**

Lunberyard field and Warehouses

船で運ばれた荷物は小さな船に積み替えられ、河川を運んで様々な地域に運ばれました。特に、大きな木材や大量の物資は、海の近くで保管・貯蔵され、必要に応じて内陸へと運ばれて行きました。内川周辺では、今でも、古くからの倉庫群や貯木場を見ることができます。貯木・乾燥を行っていた人々が徐々に加工や建築などへと事業を広げ、現在の地域の産業を支える存在になっています。富山新港となる以前にあった放生津潟は、内川を通して運ばれた木材を保存する、天然の貯木場としても利用されていました。



▶ 貯木場として活用されていた放生津潟 / 昭和40年ごろ (射水市新湊博物館提供)

いしとも  
**石友ホーム**

Map A-1

Ishitomo Home



創業当時、能登から木材を運搬していた船 (提供:石友ホーム(株))

昭和23年(1948)、「石灰木材」として創業。平成元年から本格的に住宅メーカーとして踏み出し、現在では15年連続工棟数北陸No.1の企業に。世代を超えて住み継げる本物の木の家を提供すべく、富山・石川・福井・滋賀と多くの営業店や常設展示場を展開しています。



展示場

よねだもくざい  
**米田木材**

Map A-1

Yoneda Mokuzai



創業当時ごろ、放生津潟付近の貯木場にて (提供:米田木材(株))

昭和30年(1955)年創業。原木や木材販売から始め、建築・リフォーム事業やソーラー事業など、徐々に暮らし・住まい全般へ活動領域を広げています。木材をはじめとした素材に対する知識や高い設計力を持つ会社です。



本社外観

神様に航海安全や商売  
繁盛などを祈願し、神  
社に奉納する絵馬。美  
しい着彩とデザインの  
ものが多くあります。

## 絵馬

Map C-1 放生津八幡宮

### 昆布の絵馬

1867年、昆布を出荷していた  
放生津商人から放生津八幡  
宮に奉納された絵馬。仙人  
が瓢箪に乗っている愉快的な  
絵柄。



Map D-2

### 堀岡神明社 船絵馬

1865年に奉納された福寿丸か  
三艘の船が描かれた絵馬。



○原屋 善左衛門



Map A-1  
三日月曾根神社  
狛犬



## 狛犬

船の航海安全を祈願し  
て奉納された石の狛  
犬。瀬戸内周辺の御影  
石や福井の笏谷石など  
で作られています。

「積船 榮祥丸」



Map A-3 十社大神

### 狛犬



金毘羅信仰は北前船最盛期  
にもたらされました。町の  
曳山囃子に「金毘羅船々」  
の残っているのは北前船主  
のいた証でもあります。

## 曳山囃子

兵庫の北風荘右衛門や箱館の  
越中屋利兵衛、大阪の木屋  
市郎兵衛など主要港の豪商  
の名前も見えます。



## 玉垣

神社や神域の周り  
にある垣根のこと。

「氏子船頭中」  
の文字が。

Map C-1 放生津八幡宮  
船頭たちが奉納

1848年、北前船  
の船長たちから  
奉納された灯籠。

## 石灯籠



13町のうち7町の  
曳山にあるお囃子。  
金毘羅様を祀った  
神社の前で演奏  
されます。



Map A-1 金刀比羅神社



### 金毘羅船々

Map A-1 六渡寺日枝神社

### 主要港の船主らが奉納

神社をぐるりと囲む272柱には、大阪  
から北海道までの海商や船名が彫られ  
ています。

「廻船船方中」の文字が。

Map C-1 放生津八幡宮

### 乗組員らが奉納



Map C-1 放生津八幡宮

### 乗組員らが奉納

1847年、北前船の乗組員たち  
から奉納された石垣。

## 石垣

Map A-1  
六渡寺日枝神社

### 山王鳥居

神仏混交の象徴  
である山王鳥居に  
は、瀬戸内産の御影石  
が使われています。

地元の廻船業者  
湊屋清右衛門と  
北野屋と八が寄進。

## 鳥居





▶22ページ  
八嶋倉庫本社  
庄川コミュニティセンター

▶2・3、23ページ  
六渡寺日枝神社

▶21ページ  
八嶋倉庫  
六渡寺営業所

▶22ページ  
米田木材

▶22ページ  
拍犬

▶22ページ  
石友ホーム本社

▶22ページ  
牧田組本社

▶22ページ  
金刀比羅神社

▶14・15ページ  
宮林家(非公開)

▶22ページ  
曳山囃子

▶22ページ  
四日曾根諏訪社

▶22ページ  
船絵馬

▶22ページ  
墓石  
墓石  
汽船模型



1591年、放生津城主・山崎長鏡の娘、かめ子の菩提寺として、旧寺を再興してできた禅宗のお寺。古くから漁師たちの崇敬を集めてきました。墓地には福井の笏谷石で作られた、地元の画家・藤田蕉陰の墓があります。

▶22ページ  
玉垣、鳥居  
拍犬(非公開)  
船絵馬



白山宮  
鳥居  
汽船模型

▶22ページ  
三日曾根神社

▶22ページ  
内川の家・奈呉、番屋カフェ



▶22ページ  
光明寺

▶22ページ  
大楽寺

▶22ページ  
和船模型  
船道具  
文献資料



船が海に戻ってくる際の目印になった椎の木があります。

▶18・19ページ  
松原酒店

▶表紙  
▶22・23ページ  
放生津八幡宮

▶22ページ  
おんぞはん



▶22ページ  
汐海家(非公開)

北前船主や網元を経て地域の産業や文化に貢献した汐海家。栄華を物語る土蔵作りの外観を見ることができます。

▶22ページ  
曼陀羅寺

▶22ページ  
墓石、おんぞはん



1294年、奈呉の浦(現在の富山湾)で法華経曼陀羅22幅を拾い上げたのが始まり。加賀藩主・前田利長の重病を祈祷快癒させたことを讃え、寄進された天満宮があります。門前に並ぶ地蔵(おんぞはん)の中に笏谷石でできたものが見つかります。

▶31ページ  
射水市新湊博物館

▶22ページ  
和船模型  
船道具  
文献資料



柴屋彦兵衛の「長船丸」をモデルに作られた実物の7分の1模型。航海の安全を祈る起舟祭で、船童(ふなだま)を記るのに使われました。

新湊  
船運  
さんぽ MAP



南島間作亡き後も事業を行っていた南嶋商行の本社として1915年に建造された木骨レンガ貼りの建物。1922年に建築業の牧田組に所有が移り、現在も保存・活用されています。国登録有形文化財。

北前船主から地域の名士として活躍した旧渡辺家。現在は宿泊施設&カフェとして楽しめます。

北前船主や網元を経て地域の産業や文化に貢献した汐海家。栄華を物語る土蔵作りの外観を見ることができます。



歴史ヒストリアチーム、とっておき！  
もっと船運を感じる方法



遠くから来た  
素材に注目!!

寺社の鳥居や灯籠、玉垣など、石の産地からも船運で栄えたありし日の姿を想像できます。北前船によって、耐久性にすぐれた瀬戸内産の御影石や、水がかかると青くなる福井産の笏石が運びこまれました。重量のある石や鉄、木材などの建材は、船底に積んで船体を安定させて転覆を防ぐ、重しとしての役割も担っていたようです。



人・船・物から  
つながりを感じる!

「板子一枚、下地獄」と言われ、ハイリスク・ハイリターンな船での交易。陸にいる船主や船問屋は出発した船が無事帰ってこられるよう祈るのみ。海上安全や商売繁盛を願い、遠く離れた津々浦々の商売先の神社仏閣などにも灯籠や玉垣、狛犬などを奉納した例が無数にあります。畏敬や親愛を示す捧げ物として石がよく使われていました。



関連する業種  
がいろいろ!

北前船全盛期は、主要港周辺で様々な業種が活躍していました。船を所有し物資の輸送をする廻船業はもちろん、船荷の手配や販売を行う問屋、内陸輸送を請け負う専門業者、津々浦々で商売をする際に留まる船宿も多くありました。航海後の慰労で山の温泉宿も賑わい、ほぼ全ての業種が船運の恩恵を受けていたと言えます。



新湊歴史ヒストリアチーム  
リーダーの一枚

内川沿いは北前船の寄港地として栄え、私が子供の頃には製材所が幾つもあり材木を筏にして運ぶ船や川から材木をトラックに乗せて荷揚げする光景をよく目にしていました。今ではこの様な光景は見る事が出来ませんが、内川はまだまだ魅力一杯。漁に出る船の行き帰りの立山連峰からの朝日、二上山に沈む夕日などの内川越しの美しい光景を見る事ができます。近年は映画やドラマのロケ地として注目され、内川沿いには町家カフェなどがオープンした新たな魅力を発信しています。内川の風情をディープに堪能するなら、内川沿いにある「水辺の民家ホテル」・「さとみんぶれいす」や旧廻船問屋渡辺邸の「内川の家奈呉」に宿泊して散策するのがお勧めです。港町の暮らしの息づかいを感じながら、ゆっくりした時間を過ごしてみませんか。



吉久 磨  
しんみなと歴史ヒストリア  
プロジェクトリーダー  
「情報を制する者は商いを制する」ビジネス社会ではよく耳にする言葉であるが、これが北前船の頃に実践されていたという事に驚かされる。船が寄港地に入るとその場所には何が

必要なか情報を集め、引札（広告のチラシ）などを上手く使い必要な物を高く売る。一年間の航海で1億円を稼ぎ、複数の船を所有していた船主は巨額の富を築いたという。しかし、航海中に嵐にあえば命に関わる事故や財産を失う事もあり、その上時代の変化にも対応していかなければならない。鉄道の発達により海路交通から陸路交通へ、電信の発達による情報の安定化や普及、小型船から大型船により事業の進化や転進が余儀なくされた。近年私達の取り巻く環境はコロナや能登半島地震等で精神的にも経済的にも大きなダメージを受け復旧復興が急がれる。私達がこのような未曾有の大災害をどう乗り越えよう対処すればよいのか歴史の中にそのヒントがあるかもしれない。

さらに深く楽しむために…  
県外も調べてみよう

- 山口県 光市/光ふるさと郷土館 防府市/三田尻塩田記念産業公園下関市/下関市立歴史博物館 萩市/須佐歴史民俗資料館
- 島根県 大田市/いも代官ミュージアム 雲南市/鉄の歴史博物館、菅谷たたら山内-生活伝承館 安来市/和銅博物館 隠岐の島町/玉若許神社、水若許神社
- 鳥取県 境港市/海とくらしの史料館
- 京都府 宮津市/府立丹後郷土資料館、旧三上家住宅、宮津市みやづ歴史の館 舞鶴市/舞鶴引揚記念館、赤れんが博物館
- 福井県 小浜市/県立若狭歴史博物館 敦賀市/敦賀昆布館 南越前町/北前船主の館 右近家 坂井市/坂井市龍翔博物館 越前町/福井県陶芸館 大野市/大野市歴史博物館
- 石川県 加賀市/北前船の里資料館、蔵六園 小松市/小松市立博物館 白山市/呉竹文庫 金沢市/石川県銭屋五兵衛記念館、大野からくり記念館、武家屋敷跡 野村家、県立歴史博物館 輪島市/本家上時国家

瀬戸内海・日本海沿岸には北前船で栄えたまちの歴史を紹介する資料館や施設がたくさんあります。他地域との「つながり」あってこそ船運ですので、地域内だけでなく、市外・県外の状況も調べてみると、より理解が深まることでしょう。

- 富山県 射水市/新湊博物館 高岡市/伏木北前船資料館、万葉歴史館 富山市/北前船廻船問屋「森家」、北前船主廻船問屋旧馬場家、水橋郷土史料館
- 新潟県 糸魚川市/マリンミュージアム海洋、白山神社 宝物殿 出雲崎町/道の駅 越後出雲崎 天領の里 長岡市/白山姫神社 新潟市/県立自然科学館、金刀比羅神社(西原島) 佐渡市/小木幸丸展示館、佐渡国小木民俗博物館、佐渡奉行所跡、史跡佐渡金山、相川郷土博物館
- 山形県 鶴岡市/致道博物館 遊佐町/旧青山本邸 酒田市/旧鎗屋、本間家日本邸、酒田市立資料館、
- 秋田県 にかほ市/象潟郷土資料館 由利本荘市/由利本荘市郷土資料館
- 青森県 深浦町/風待ち館、円覚寺 五所川原市/市浦歴史民俗資料館 青森市/あおもり北のまほろば歴史館 野辺地町/野辺地町歴史民俗資料館 佐井村/海峡ミュージアム



江戸時代後期からの廻船交易は、様々な文化を残してくれました。その代表は昆布を食べること。越中(富山県)の人々は、廻船の積み荷でもあった昆布のおいしさに気づき、食文化に取り入れられました。富山はダントツの昆布消費県。料理は昆布巻、昆布締め。昆布おにぎり、おやつも昆布。昆布専門店がいくつもあります。

協力 松山 充宏

射水市 新湊博物館 (定休日 火曜、祝日の翌日)  
所在地 射水市鏡宮299 TEL 0766-83-0800  
開館時間 9:00~17:00 (入館~16:30)

事務局長 砂原 良重 見崎 華子  
形は変われども北前船によってもたらされた知識や産業の名残が現代にもあり、その影響力をうかがい知ることができます。現代において立ち向かうべき事象は多々ありますが、先人たちの、航路を切り拓いたり情報を駆使したり、販路拡大や売上増加を成し遂げ一時代を築いたバイタリティは、激動の時代を生きた私たちに鼓舞してくれるように感じます。その知恵や恩恵を無駄にすることなく、今また新たな時代を切り拓く時なのかもしれません。

あとがき 失敗を恐れず、変化し続ける!

船運がもし、今のビジネスの中心にあったら…。大きな船と乗組員を確保し、より早くより稼げる各地の情報や人とつながり、安く仕入れてできるだけ高く売る。生馬の目を抜くような目まぐるしさで、時代の波に乗った者が勝負弱肉強食の世界。北前船最盛期からは早いスピードで状況が変わり、北洋漁業へ切り替えた者、さらに新たな汽船を購入して事業拡大に向かった者など、群雄割拠の時代。インターネットのなかった時代に周囲の反対を押しつけ、新たな事業や未開の地に漕ぎ出して行った先人ら

のビジネス感覚の鋭さ、華麗なる転身を遂げた潔さに痺れます。変化を恐れず最善を尽くす。廻船船主の数は新湊周辺がダントツで多かったのも、進取の気性に富んだ地域性を表している気がします。先人たちのチャレンジ精神がなければ、私たちが立っている場所はまたぎっと違った顔をしていたことでしょう。先の読めない、VUCAな時代の今だからこそ、失敗を恐れず変化し続ける!…そんなメッセージを受け取ったような気がして、なんだか勇気が湧いてきます。

デザイン・編集: 明石あおい